令和４年第１回津島市総合教育会議　議事録

1.　日時

令和４年８月 10 日（水）　午後２時から午後３時 15 分まで

2.　場所

津島市役所　３階市長公室

3.　出席者

構成員：日比市長、浅井教育長、小出委員、猪飼委員、奥村委員
（欠席：畑中委員）

事務局：市長公室長、教育委員会事務局長、企画政策課長、学校教育課長、指導主事、社会教育課長、担当職員１人

傍聴者：０人

4.　議事

①　デジタル田園ロボット・ブロックプログラミング教育事業について

②　津島 Style①　生きる力を育む「津島っ子」大作戦について

5.　会議内容

1）あいさつ

（日比市長）

・新型コロナウイルス感染症の第７波の到来により、多くの感染者が出ており、誰が感染してもおかしくない状況となっている。

・市内の小中学校でも夏休み前には学級閉鎖や学年閉鎖となった学校もあり、当市としても引き続き感染拡大の防止に努めているところである。

・今年２月に開催した前回の会議では、「令和４年度予算における主な事業について」、「教育に関する施策の大綱（案）について」、「津島市教育振興計画（案）について」の３件を議題として、貴重なご意見をいただいた。

・今回は、「デジタル田園ロボット・ブロックプログラミング教育事業について」と「津島 Style①　生きる力を育む「津島っ子」大作戦について」の２件を議題としている。いずれも当市が現在進めている教育施策に関連する内容となっている。

・前回同様に、有意義な意見交換をしていきたい。

（浅井教育長）

・新型コロナウイルス感染症の第７波のピークの状況である。夏休みでなければ学級閉鎖や学年閉鎖が数多く出ていたと思う。
・令和４年度は、本日の議題の「デジタル田園ロボット・ブロックプログラミング教育事業」、「津島 Style①　生きる力を育む「津島っ子」大作戦」に加え、全小中学校の照明器具 LED 化、神守中と蛭間小の体育館の改修実施設計など、大きな事業が目白押しであり、現在進めているところである。
・市長のマニフェストの１つである「子ども子育て応援都市 つしま」が進む中、津島市の魅力の１つに教育が挙げられ、津島市は教育が魅力的なので移り住みたいと思ってもらえるように進めていきたいと考えている。
・市の教育に対する率直な意見をいただき、今後の教育行政に生かしていきたい。忌憚のない意見をお願いしたい。

2）議題１　デジタル田園ロボット・ブロックプログラミング教育事業について

（日比市長）

・デジタル田園ロボット・ブロックプログラミング教育事業について事務局から説明する。

（学校教育課長）

・津島市では、「デジタル化で、しあわせ実感都市　つしま」を目指すと、宣言し、デジタルを市民の皆様や職員の幸せ、すなわち、「ハピネス」に繋げていきたいと考え、デジタルを活用した意欲ある地域による自主的な取組を支援する「国のデジタル田園都市国家構想推進交付金」にチャレンジし、市民窓口 DX、防災 DX、プログラミング学習の 3 つの事業で 9,000 万円の採択を受け、事業を進めていく。
・この事業の予算額は約 2 億 1,000 万円で、財源は、2 分の 1 はデジタル田園都市国家構想推進交付金を活用し、残りの 2 分の 1 は市の一般財源となるが、そのうちの 8 割は新型コロナウイルス感染症関連の交付金が措置され、市の負担は事業費の 1 割となる予定である。
・教育関連の事業は、全国初の導入規模で人型ロボットによるプログラミング学習に取組むということで、楽しくて役に立つプログラミング学習を目指す。この事業の予算額は、8,450 万 6 千円となる。
・人型ロボットと学ぶプログラミング学習は、小中学校の総合的な時間などで、AI 機能を持った人型ロボットを動作させることや英語発音練習機能などを通して楽しくプログラミングを学習し、12 小中学校で 252 体を導入する。
・ブロックによるクリエイティブなデジタル学習も、総合的な学習や教科の時間で、プログラミング可能なブロックを使い、本格的なプログラミングロボ

ットを制作し、将来、AI 開発等に必要なプログラミングの基礎を学ぶなどデジタルを通して、自分の思いを形に表す創造力を培う。小中学校では 252 セット、放課後子ども教室では 40 セットを導入する予定である。

・プログラミングは、Scratch（スクラッチ）のように、指示内容を組合せ、指示した言動をさせるものになる。

・実際に導入する人型ロボット、ロボホンは、丸みのある、とてもかわいらしいロボットである。あいさつ、自己紹介、踊りやダンスなど、話しかけたことに対応してくれる。セリフや動きをプログラミングできるロブリックと画像認識の機能を使い、楽しく遊ぶ感覚でプログラミングに取組むことができる。

・日本語だけでなく、英語、中国語、韓国語の 4 か国語に対応しており、英語学習では、プログラミングをすることにより、英語の発音練習、リスニングの練習にも使うことが可能である。

・ブロックプログラミングに関しては、レゴブロックとプログラム可能なハブや高性能ハードウェアを使用し、Scratch（スクラッチ）ベースのプログラミングを組み合わせて活用する教材となる。500 個のカラフルなブロックパーツと 2 種類のモーター、2 種類のセンサー、ラージハブが一つのセットになる。

・問題解決型のプロジェクトを通して楽しみながら実社会で役に立つスキルを育むことを可能にし、児童生徒が、AI、IoT 社会で輝くために必要な STEAM（スティーム）教育を行う。これは、科学のサイエンスの S、技術のテクノロジーの T、工学のエンジニアリングの E、数学のマセマティックスの M として、統合的に学習する STEM（ステム）教育に、更に芸術などのリベラル・アーツのアーツの A を加えた教育である。これらの科目への自信と 21 世紀型スキルの習得を、遊び心も大切にしながらサポートしていくツールになる。

・今回、ブロックを導入するにあたり、3 か年で実施する計画であり、3 年目には中学生を対象にした大会も予定し、コースシートも整備している。

・ブロックの実践例として、ホッパーを紹介する。これは、モーター部分のブロックなどを組立て、腕を回転させて動くロボットである。プログラミングの指示内容や腕のパーツを工夫して、目標までの速さを競うことができる。どのようにしたら速くロボットを動かすことができるか、どのように指示するか、どのブロックパーツを使うかを考え、実践を繰り返す。

・人型ロボットとブロックに関する先生への講習会を夏休み中にできるよう、お盆過ぎから、順次進めていく。また、現在、10 月以降に外部講師による児童生徒への授業の取組を調整している。

・併せて、プログラミング教育を専門としている大学教授による授業内容等の助言や指導を受けることや大学生ボランティアに授業支援に入ってもらうことについても調整を行っている。
・今年度、小学生は5年生を、中学生は2年生を対象に人型ロボット・ブロックを活用したプログラミング教育の授業実践を進めていく予定で、次年度以降、3か年計画で全学年において進めていく。

（社会教育課長）

・デジタル田園ロボット・ブロックプログラミング教育事業のうち、社会教育課所管の事業について、国のデジタル田園都市国家構想推進交付金を活用して、放課後子ども教室において、子どもたちが自発的に楽しみながらプログラミング的思考を学び、創造力や探求心を育むことを目的に、オンラインを活用したプログラミング機材を配備する。デジタル田園ロボット・ブロックプログラミング教育事業の総事業費8,450万6千円のうち、社会教育課分は394万1千円である。
・配備する学習機材はタブレット型パソコン、ブロックプログラミング学習キット各教室5セット程度で、アプリの中に、ロボットレシピ、学習コース、自由制作のコースがあり、初心者から、自分でプログラムを組んでオリジナルのロボットを作るレベルまで対応しているため、子どものプログラミング知識の段階に応じて学習できる内容となっている。子どもが一人でも、アプリを操作しながらロボットプログラミングを学べる体験型のものである。
・放課後子ども教室としては、令和3年度に特定非営利活動法人放課後NPOアフタースクールの連携・支援により、高台寺小学校放課後子ども教室で、プログラミングや動画づくりを学ぶプログラム「ロボットプログラミング学習キットを使ってロボット動画づくりにチャレンジしよう！」を実施した実績がある。
・昨年度実施したプログラムは、ブロックで組み立てた動物等を、タブレットで作成したプログラミングで動作や音や光を出す指示を与え、動くロボットの様子を写真や動画で撮影して、タイトルや効果音を入れて動画編集を行い、その後、完成したロボット動画の鑑賞会を行うという内容である。
・子どもたちが楽しく積極的にプログラムに参加している様子がうかがえた。

（奥村委員）

・ロボット・ブロックプログラミングについての具体的な説明を聞き、すごいレベルのことをするのだとワクワクしている。子どもたちの将来につながると大変期待している。大成功させて津島市の教育をアピールしてほしい。

（猪飼委員）

・国の交付金をうまく活用できている。津島市の看板となる事業なので、うまく PR してほしい。ロボット・ブロックプログラミング教育事業と名称が長いので、津島市独自のネーミングを考えて PR するとインパクトがあるのではないか。
・「習うより慣れろ」で使ってみると色々なことがわかると思う。バージョンアップしてうまく活用できれば最高である。

（小出委員）

・デジタル関連ということで新しい言葉も多く、人によってはなかなか理解できないこともある。この内容を人に説明する場合は、まずは自分がきちんと理解してから話をしなければ、人に理解してもらうことはできない。市民や、先生・子どもに説明する際は、きちんと理解した上で、その相手に合わせた内容で丁寧に話をしなければ、せっかくのいい内容がきちんと相手に伝わらない。
・3 年間の計画で進めるとのことだが、3 年で終わりとならないように、急がず着実に進めてもらいたい。
・全国初の規模で導入するので、他の自治体等から視察に来ることも考えられる。
・子どもの役に立ち、市民が自慢できるようになることを期待している。

（浅井教育長）

・この事業を実施する上で忘れてはいけないことは、一見楽しそうで派手に見えるが、今の教育の根本となる子どもたちの論理的な思考力を身につけさせる事業ということである。今の子どもたちには、筋道を立てて考える力が欠けており、論理的な思考力を育てることができるということが非常に大きい。また、日本全体でも理数教育を嫌っている子どもたちが非常に多いので、この事業を通じて理数好きになるきっかけとなればと考えている。この 2 つがこの事業をやりたいと思う大きな理由である。論理的な思考を見える化して、楽しく役に立つ教育を行っていきたい。
・新聞社や教育関係の出版会社などから取材をさせてほしいという話を聞いており、非常に関心が高い。
・学校と連動して放課後子ども教室でも探求学習として実施できれば素晴らしいと思う。名城大学や至学館大学の先生も協力してもらえるし、大学生の専属ボランティアも 4 名確保した。
・先生たちも夏の間に研修を受けるが、すぐに触ることができる先生と、時間がかかる先生と差が出るので、ベテランの先生もアレルギーを起こすことのないように進めていきたい。

（日比市長）

・津島市の教育は、この事業と領事館プロジェクトにより、教育のトップランナーになることができると思う。子どもたちが嫌々学ぶのではなく、人型ロボットにより「楽しくて役に立つ」学習を行うことができる。

・津島市は今年度、国の交付金をうまく活用しているが、来年度からは交付金の要件等も変わってくると思われるので、来年度以降に他の市町村が同じような事業を実施することができないと思われる。交付金の申請の際には担当者が非常に苦労したが、採択されて本当に良かった。

・日本語だけでなく、英語、中国語、韓国語の 4 か国語に対応している。

・先生たちにも夏休み中に研修を受けてもらわなければならないので申し訳ないが、事業の実施には必要となるものである。心配な点はあるが、それを乗り越えて、子どもたちにワクワク、ドキドキ、笑顔を与えられるように取り組んでいきたい。授業だけでなく放課後子ども教室でも実施し、しっかりと育てていきたい。

・津島市の教育を上手に PR できるようなネーミングについても検討したい。

・いただいた意見を参考に事業を進めていきたい。

3）議題 2　津島 Style①　生きる力を育む「津島っ子」大作戦について

（日比市長）

・津島 Style①　生きる力を育む「津島っ子」大作戦について事務局から説明する。

（学校教育課長）

・市の若手職員提案事業で、市の 20 代から 30 代の若手職員 12 名の 4 グループが提案した事業を形にしたものである。国の地方創生推進交付金を活用して、令和 4 年度の補正予算対応で、予算額は単年度で、約 3,389 万円だが、3 年間の事業費としては、1 億 1,000 万円を超える予定の事業になる。

・3 つの「津島 Style」を創出し、住んで良し、訪れて良し、と魅力的なまちを目指す取組みである。

・教育関係としては、最初の津島 Style①　生きる力を育む「津島っ子」大作戦で、子どもの読解力向上事業と子どもの体力向上事業に取組んでいく。事業費の予算額は、2,507 万 8 千円で、子どもの読解力向上事業分は、1,650 万 2 千円、子どもの体力向上事業は 857 万 6 千円で事業を進めていく。

（社会教育課長）

・変化の激しい社会を生きる子どもたちには、確かな学力、豊かな人間性、健やかな体の 3 つの要素からなる「生きる力」が求められている。

・社会教育課所管の子どもの読解力向上事業では、生きる力の３つの構成要素のうち、確かな学力の定着と豊かな人間性の育成を目指す。
・本事業は、読書活動を推進することにより、確かな学力の基盤となる読む力、読解力の向上を目指す。また、様々な本を読むことは、他者を思いやる心や感動する心といった、豊かな人間性の育成に寄与すると考える。
・事業内容としては、読書の履歴を記録する読書手帳の配布と市立図書館に電子図書館を導入する。
・読書手帳とは、おくすり手帳のようなもので、読んだ本の情報を印刷したシールを貼る手帳で、中学生以下の子どもたちに配布する。読書手帳に貼った読書シールを見ると、読書の履歴を振り返ることができる。読書記録の蓄積は、たくさんの本を読んだという達成感、自己肯定感（自分の価値を認める感覚）につながり、さらに、もっと本を読んでみようという意欲を高めることにつながるのではないかと考えている。
・電子図書館は、図書館で本を借りて読むことに親しみのない子どもたちにも、気楽に利用していただき、読書のきっかけを作ることを期待している。また、市内小中学校の児童・生徒には、朝の読書タイムなどに、タブレットから電子図書館にアクセスして、電子書籍を読むことができる。
・読書手帳の配布や電子図書館の導入は、子どもたちの読書活動を支える環境やツールの整備であり、その上で、子どもの読書活動が充実するよう働きかけをしていく必要があると考えている。

（学校教育課長）

・学校教育課所管の子どもの体力向上事業について、津島市では、これまでに、市、独自の取組として、総合的な子どもの基礎体力向上大作戦、SKIP（スキップ）として、学校における体力づくりの推進、地域におけるスポーツ少年団活動の充実、家庭における早寝、早起き、朝ごはん運動の推進に取り組んできた。
・しかしながら、令和３年度の全国体力テスト（小学５年生と中学２年生が対象）の結果において、ほとんどの種目で県の平均値を下回る状況であった。そして、愛知県の体力テストの結果は、全国で長期間、低位に停滞している状況でもある。更に、コロナ禍において、学校生活では活発な運動ができない状態が続いており、教職員もその対応に尽力しており、働き方改革の取組みの中で苦慮している状況である。
・そこで、子ども達、教職員も体を動かす習慣をつける取組みとして外部講師等を活用して、令和４年度はサーキットトレーニングと縄跳び、そして中学生向けに講演会を予定しており、現在、日程調整を行っているところである。

・サーキットトレーニングは、学校の体育主任の先生を中心に、大学の准教授の助言、指導を受けながら、楽しんで体を動かし、体力向上につながるトレーニング内容を作り、実践していく予定である。
・講演会には、津島市出身のアスリートで、2015 年正月の箱根駅伝では往路、第 5 区の山登り区間において当時の区間新記録を打ち立て、「三代目山の神」、「山の神野」と言われた、神野大地選手にご講演いただく予定である。
・令和 5 年度には、ダンス教室を加えて、実施していく予定である。
・今回、生きる力を育む「津島っ子」大作戦における、子どもの体力向上事業により、楽しみながら体を動かすことができる事業を実施し、子どもや教職員にとってモチベーションを高めることができるとともに、体を動かすことに抵抗がなくなっていく。また、運動習慣がない子ども達にとっては、運動する動機づけを行うことができ、教職員についても研修等により、指導ポイントを理解することにより、体力づくりに力を入れることができると考えている。
・更に、今回、大学生ボランティアに授業支援に入ってもらうことにより、年齢が近い斜めの関係により、子どもたちが楽しく学習活動に取組み、体を動かし体力を培っていくことにより、体力の向上が期待できると考えている。
・縄跳び教室では、講師としてなわとび名人に来てもらう。講師の 1 人は、世界的なサーカス「シルク・ドゥ・ソレイユ」に専属契約し、スキッピング・ロープ　アーティストとして活躍され、なわとび競技の元アジアチャンピオンである。もう 1 人は、人類初の 7 重跳びをはじめ、4 つのギネス記録を持つ方などである。
・講師が主催している日本なわとびアカデミーの教室からは、日本代表選手、アジアチャンピオン、世界チャンピオンが多数輩出されていて、指導経験、知識は申し分ないと考えている。
・なわとびの跳び方、体の使い方など、子ども達、教職員も一緒に教わって、体力向上、指導力の向上につなげていきたい。

（猪飼委員）

・発想豊かで面白く有意義な事業であり、従来の枠を超えた効果が期待できる事業だと思う。生きる力を育むための 3 つの要素がポイントとなる。
・読解力向上に関しては、市立図書館の指定管理者である NPO 法人まちづくり津島とうまく連携できると面白いのではないか。
・縄跳び教室ではすごく高いレベルの講師であり、先ほどのデジタル田園ロボット・ブロックプログラミング教育事業と同じで、うまく形になっていくとインパクトがある。

（奥村委員）

・画期的な事業だと思う。

・1 人 1 台のタブレット端末があるので、学校で朝に実施している読書タイムの際に、タブレット端末を使って読書すれば、タブレット端末を使用する習慣づけにもなる。

・市立図書館についても、図書館まで行くことを面倒に感じる市民もいると思うので、市民が図書館に行かなくてもいつでも電子書籍を借りられると素晴らしいと思う。

（小出委員）

・若手職員からの提案を基に事業化したとのことで、今までの取組とは違うと感じた。若い人の考えを取り入れないと活性化しない。若い職員の提案を取り上げたのは非常に感心した。是非成功させてあげたい。

・縄跳び教室に関しては、世界的に活躍している人が講師として身近に来てくれることは、子どもにとっていい機会となる。

・子どもを喜ばせることを実施していくと津島市はよくなると思うので期待している。

（浅井教育長）

・若手職員による事業提案のプレゼンテーションを聞いたが、どのように形になるのか関心を持っていた。このように事業化され、新しい力を活用することになったことは非常にいいことだと感じている。

・社会教育課所管の子どもの読解力向上事業と、学校教育課所管の子どもの体力向上事業も狙いは同じである。本を読んで学力の向上と豊かな心を育成すること、体力をつけて健やかな体を育成すること。手法は異なるが、基礎的な学力や体力をどのように工夫して身につけさせるかという点が非常に似ている。

・縄跳び教室の講師は世界的に活躍している方だが、地元の蟹江町を本拠としている。また、子どもたちの間でダンスが大ブームとなっているので、ダンス教室もやっていきたい。

・学校で実施している朝の読書タイムは性格が変わりつつある。これまでは生活指導の一環として、朝から落ち着いて読書することで、子どもたちが落ち着いて学習できることが狙いだったが、本を読むことを好きにしていくことも目的となってきている。電子書籍などでも様々な本を読むということもよいと思う。

・子どもたちは読書にしてもスポーツにしても好き嫌いの二極化が進んでいる。この問題をどう解決していくのかという点で、この事業は体力や学力を

身につけるために非常に大きい。

・説明の中で津島市は体力テストの順位が低いとの話があったが、今年の全国学力学習状況調査の結果においては、全国平均並みであった。

（日比市長）

・若手職員からの提案により 3 つの事業を事業化し、教育に関する事業は先ほど説明があったとおり、読書と体力向上という 2 つの分野を 1 つの事業としている。重要なのは若手から提案があった内容を基に事業化したということである。3 つの事業はいずれも 3 年間の計画で、事業費の合計は 1 億 1,000 万円を超える予定である。事業名についても、ワクワクするものとなっている。

・現在、国に対して計画書を提出し、採択結果が分かるのは 8 月中下旬の予定だが、万が一採択されなくても事業実施しようと考えている。

・これまでの市の財政状況から、財源が厳しいと思っている職員もいるが、今はそうではない。今後も色々と提案してほしいと思っている。

・ここでも「楽しくて役に立つ」がキーワードであり、子どもたちが楽しみながら読書や体力づくりに取り組むことができる。

・いただいた意見を参考に事業を進めていきたい。

4）その他

（日比市長）

・8 月 2 日に開催した部落解放愛知県共闘会議との懇談会において、ヤングケアラーについて話が出たが、当市の状況はどうか。

（学校教育課長）

・ヤングケアラーとは、「本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っていることにより、子ども自身がやりたいことができないなど、子ども自身の権利が守られていないと思われる子ども」のことである。

・先日、部落解放愛知県共闘会議との懇談会において、「愛知県ヤングケアラー実態調査」の結果を津島市としてどのように受け止めているか、スクールソーシャルワーカーの関わりについて話しがあった。

・8 月 1 日の中日新聞に、ヤングケアラーの情報集約へ、ということで、大人に代わり日常的に家事や家族の世話をするヤングケアラーの支援対策強化へ、厚生労働省が、学校などで把握されたケアラーの情報を各自治体の一部門に集約する新たな枠組み作りに取組むという記事が掲載された。新しい枠組では、ケアラーの情報は、学校からスクールソーシャルワーカーを通じて自治体に伝わる流れで、集約先は児童福祉部門などを想定するとされてい

る。

・2022年3月に愛知県福祉局児童家庭課が公表した「愛知県ヤングケアラー実態調査報告書」によれば、小学5年生で16.7.％、中学2年生で11.3％が家族の中にお世話している人がいることが明らかとなった。この数値から、どの学校にもヤングケアラーがいる可能性があり、この問題は潜在化しやすいものであると考えている。

・市としては、児童生徒が大人にSOSを出しやすい環境づくりを進め、児童生徒の気持ちに寄り添いながら解決できることを一緒に考えていくことが大切であると考えている。

・児童生徒だけではなく世帯全体への支援が必要なケースでは、福祉をはじめとした関係機関との連携が不可欠と考えている。現在のところ、不登校や虐待などのケースを福祉、教育部門や県の児童・障害者相談センターの関係者を含めた要保護児童ネットワーク会議を子育て支援課の家庭児童相談室が中心となって行い、情報共有を行っている。

・様々な問題を抱えている児童生徒や家庭に対して、社会福祉などの関係機関へ働きかけて支援を行うスクールソーシャルワーカーの配置を、今後、来年度にはしていきたいと考えている。

・なお、スクールソーシャルワーカーの配置ができるまでは、ヤングケアラーに該当する児童生徒の把握については、各学校の教頭先生を窓口にして、情報把握をしていく。

・ヤングケアラー情報集約の動きについては、今後も国の動きを注視していきたい。

（奥村委員）

・ヤングケアラーの率を聞いてびっくりした。先生が児童生徒を見て、ヤングケアラーだと分かるのか、洗い出してしっかりとケアしなければならないのではないか。どのように家庭の状況を把握するのか等、非常に難しい問題である。

（猪飼委員）

・以前に教育委員会でも取り上げたことがあるが、先ほどの説明にあったようにきちんと表に出して捉えられるようになればいいと思う。そこがポイントではないか。

（小出委員）

・家庭の中に入っていかなければならないという点で、学校では家庭に入っていくことはできない。子どもは家庭のことは先生には話さない。子どもが話すことができるのはどこなのかを見つけなければならない。

・家庭の中に入っていくには、こういった場合には入ってもいい、などを規定する条例等も必要となるかもしれない。そういった社会的約束を作った上で、家庭の中に入っていかなければならない。
・ヤングケアラーの問題に関心を持つことはいいことである。家庭にはいろいろな事情があるので、話を聞くだけではなく、親身になって寄り添って解決する力のある人がいないと救うのが難しい。
・コミュニティなどの地域の方の中で考えてくれる人があれば、救われてくるのではないか。

（浅井教育長）

・教育委員会でも話をしたが、どういう方法があるか非常に難しい。
・市内の小中学校に確認したところ、実際にヤングケアラーとなっている子どもがいる学校もあった。これは服装などを見て分かったり、家族の世話等で学校に来られない状況が続いていたり、はっきりとヤングケアラーだと分かったケースであった。しかしはっきりと分かる状態でない場合は、把握するのが難しい。
・民生児童委員も情報がなく、プライベートを理由にして家庭が外部からの接触をシャットアウトし、状況が把握できないので学校から情報提供してほしいということであった。民生児童委員がうまく動いてくれるとヤングケアラーの問題は少なくなると思う。
・今日のような会議でヤングケアラーを取り上げることも大事だし、学校でも担任や養護教諭を中心に関心を持ち、教頭先生を通じて情報を集めることが一番ではないかと思う。学校が気が付くような状況は、黄信号となっている状況だと思う。方法を考えていきたい。

（日比市長）

・どのように情報を集めて寄り添えるのか、情報を共有していくことが大事なので、できることから考えて対応していきたい。引き続きよろしくお願いする。

（企画政策課長）

・総合教育会議は、例年、年２回程度開催しており、次回の会議は、来年２月頃を予定している。日程が決定次第、教育委員会を通じて連絡する。